デカルトとイエズス会学校人文主義教育

――よく書くために――

久保田　静　香

11 歳の春から 19 歳の秋までの 8 年半を、デカルトはイエズス会ラ・フレーシュ学院の寄宿生として過ごした[1]。学院を出て 30 年後、デカルトはそのもっとも有名な卒業生として、母校を「ヨーロッパでもっとも有名な学校のひとつ」（AT, VI, 5）であると、彼の名をもっとも有名にした著作のなかで誇らしげに語るだろう。当の学院が設立されたラ・フレーシュ La Flèche は、ル・マンとアンジェをむすぶ幹線道路のちょうど中程に位置する小さな町である。やがてそそぐ大ロワールの北 50 キロを連綿と 200 キロほど並行し、渓谷の森をぬけて流れる小ロワール川沿いにあるこの町は、明るく澄んだ水と緑に恵まれ、白く清潔な町並みがそれによく映える。1 時間たらずでひととおり歩いてまわれてしまうほどの小さな町だが、ここに 17 世紀初頭、少年デカルトに「もしもこの地上のどこかに学識ある人がいるとするなら、この学校にこそいるはずだ」(AT, VI, 5)との期待と自負を抱かせる学校がイエズス会士たちの手で建てられた。18 世紀にはデイヴィド・ヒュームが『人性論』執筆のためにわざわざここを訪れ、丸 2 年を過ごしている。19 世紀初め、ナポレオン一世の時代に陸軍幼年学校となった。以来変わらず現在も使用されている。

そもそもこのラ・フレーシュ学院の設立までには複雑な経緯がある。周知のようにイエズス会はスペイン人イグナチウス・デ・ロヨラ（1491-1556）によって旗揚げされ、1540 年にローマ教皇パウルス三世によって認可をあたえられた年をもってその公式設立年とされる。ドイツを火元として当時ヨーロッパ全土にその猛火を日々ひろげていた宗教改革の勢いをおさえるべく、ローマ・カトリック教会は、この新興修道会たるイエズス会を、ローマ教皇に絶対の忠誠を誓う遊撃隊として、プロテスタントの手におちた失地回復のための戦略的活動の最前衛においたのだった。いわゆる“反宗教改革”の目的達成のために、イエズス会がいちばん力をそそいだのが「教育」であったとはどの歴史書も説くところである。まさにこの「教育」を武器としてイエズス会は、プロテスタントに対するローマ・カトリック教会側のめざましいまでの巻き返しに寄与し、ほどなくその活動領域をヨーロッパの彼方へとひろげ、ブラジルや日本にまで管区を拡張していく。こうしてイエズス会は瞬く間に世界規模の一大修道会として名をなすのだが、しかし、殊にフランスでの教育＝布教活動においてさまざまな壁にぶつかることになる。そのひとつが、中世以来、教皇権の保護下で自治をおこない教育の現場を独占していたパリ大学の抵抗だった。加えてフラ

ンス独自のガリカニスムの伝統が、教皇至上主義（ウルトラモンタニスム）を奉ずるイエズス会と、宗教・政治の両面でイデオロギー的に激しく衝突する。

この“近くて遠い”フランスにおいてさまざまな困難に晒されながら、イエズス会はようやく1556年、オーヴェルニュ地方のビヨン Billom にフランス初の同会学校設立の夢がかない、さらに1563年にはパリにクレルモン学院（のちのルイ・ル・グラン校）を開くことにも成功する(2)。しかしながら、1594年にそのクレルモン学院に学んでいた一生徒が時のフランス国王アンリ四世の暗殺をくわだてたかどで、同修道会はフランス全土からいったん追放されてしまう。にもかかわらず、その同じアンリ四世によって1603年、イエズス会はフランス国内への帰還を許され、ふたたび国内に学校を開くことをみとめられるのである（ルーアン勅令）。ラ・フレーシュ学院が設立されたのは正確には1604年だが、これはイエズス会フランス復帰後初の学校開設の例として歴史的に特記される。それにしてもなぜこのときラ・フレーシュなどという、アンジュー州の辺地ともいうべき土地があえて選ばれたのか。じっさい辺地ではあるが、そのいっぽうでラ・フレーシュにはブルボン家ゆかりの地としてのれっきとした由来があり、アンリ四世がイエズス会に最初にあたえたのは、王の少年時代のなつかしい思い出がつまったラ・フレーシュの城であった。この町に寄せる王の愛着がいかに大きなものであったかは、王が遺言のなかで、死後は自分と王妃の心臓をラ・フレーシュ学院の教会堂中央に葬ってほしいとしたためていることからも推察されよう。このラ・フレーシュ学院の正式名称は、「ラ・フレーシュ＝アンリ四世王立学院 Le Collège Royal Henri IV de la Flèche」という(3)。

少年デカルトがラ・フレーシュ学院でうけた教育は、イエズス会がこうしてようやくフランスにその足場を築き、いざ本格的再始動へとの気運が最高潮に達し、その独自の新しい教育方針維持への意思がもっとも高かった時期のものであるといえる。じっさいイエズス会教育は西欧教育史上にその名をとどめる画期的な教育プログラムを組んで、ヨーロッパ古典期と呼ばれる時代において教育の分野で尋常ならない役割を果たした。本稿では、そのイエズス会教育になにか新しさと呼べるようなものがあったとするなら、それはどのような点にみとめられるのか、それはじっさいにどのような内容をもつものであったのかをまず確認することから論を起こし、それらにもとづいてイエズス会教育にかんするデカルトのじっさいのテクストにあたっていくことを基本的な作業姿勢とする。そのさい必要に応じてイエズス会の教育テクスト『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』もたびたび参照することになるだろう。たしかにデカルトはラ・フレーシュ学院で学んだことのすべてを放棄したと言明した。だがそこでの教育は同時にデカルト自身の人間形成に直接かかわっていただけに、教育をめぐる彼の思想と言葉を正確にとらえることはしばしばはなはだ困難となってくる。以下、その込み入った事情を可能なかぎり具体的な事例によって考察し、最終的に、イエズス会教育がいかにデカルト哲学そのものの存立と深い関係をなしているかについて明らかにできればと考えている。

『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』における文学的ユマニスム

イエズス会教育について語るさい、ルネサンス人文主義にふれないわけにはいかない。両者の結びつきは非常に強く、後者が前者の“オリジナリティ”を語るために引き合いに出されることもしばしばである(4)。じっさいイエズス会士たちは、中世スコラ主義的教育方法にルネサンス人文主義教育理念を連係させ、調和させて、その教育制度を独自で不動のものとした。イエズス会の教育方針および教育プログラムの革新性がことのほか謳われるとしたなら、それは西欧教育通史的にみられたさいに浮き彫りとなる、同会学校人文主義教育の特異性に焦点があてられてのことなのである。

が、だからといって、西欧教育史上“初めて”ルネサンス人文主義をその教育プログラムにとりいれたのがイエズス会であるとはけっしていえない点に注意する必要がある。その直接のモデルは16世紀初頭のパリの数々の学寮（コレージュ）が提供したといわれ(5)、また、1538年にドイツ人人文主義者のヨハネス・シュトゥルムによってストラスブールに設立されたプロテスタント系ギムナジウムでは、イエズス会の試みを先取りするような教育内容がすでにみられるとの研究もある(6)。しようと思えばさらに時代をさかのぼって、これらに先立つ例を指摘することもできる。14世紀末から15世紀初めに「共同生活兄弟団」によって建てられた学校がそれであり(7)、さらには、12世紀のシャルトル司教座聖堂学校での試みをルネサンス人文主義的教育の淵源とする向きもある(8)。

こうしたなか、ではなぜあえてイエズス会教育が、きわだって歴史的に独自で不動のものとなりえたのだろうか。おそらくそれはイエズス会士が、歴史にその名を刻むにたるテクストを残したからである。『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』がそれであり(9)、全編ラテン語で、もっぱらイエズス会学校で教鞭をとる教員向けに書かれている。その内容は、生徒の教育指導にかかわるものだけでなく、学校の運営管理にまでおよんでおり、詳細をきわめている。上はその学校が属する管区長から、校長、学監、各科目専門教員、下は学校用務員まで、完全なピラミッド型組織構造のもと、それぞれの役目、仕事内容、教授内容等々、巨細にわたって規定されている。じっさいこれにひととおり目をとおせば、当時イエズス会学校でなにがどう行なわれていたか具体的に想像できるほどである。もっとも、この詳細きわまる教育プログラムの策定作業とテクスト化には、じつに半世紀もの時間が費やされている。理論的検討と実践的試行のたえまない繰り返しのなか、とりわけ第五代イエズス会総会長クラウディウス・アクアヴィーヴァのもとでの同規定の本格的策定努力が功を奏し、1586年に第一次草案、1591年に第二次草案がそれぞれ世に問われ、そこにさらに加えられた検討をふまえて、1599年、ようやく決定版が日の目をみるにいたるのである(10)。もとよりこの『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』は、イエズス会創設者イグナチウス・デ・ロヨラの教育理念に添うことをその意としている。ロヨラがパリでの勉学期間中（1528-1535）にえた「人文学 l’étude des lettres, les humanités」の重要性の認識は、『イエズス会憲・第4部』（1558）に明瞭に反映されてお

り[11]、これがやがてなる『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の骨子となったのである。

まさにこの『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』というテクストを教育の現場に体系的かつ戦略的に適用することで、イエズス会は、とりわけ17世紀から18世紀のヨーロッパ教育地図の書き替えに、さらにはその近代化に、積極的にはたらきかけていくことになる。イエズス会学校出身者の顔ぶれをみれば、その貢献のほどはいっそうよく知られよう。聖フランソワ・ド・サル、ベリュル、サン＝シラン、メルセンヌ、ゲズ・ド・バルザック、デカルト、コルネイユ、コルベール、モリエール、ボシュエ、フェヌロン、ジャン＝フィリップ・ラモー、ヴォルテール、ディドロ……、主だったところをあげただけでこれだけの名がそろう。近代とよばれる時代が芽生え、やがてそれが成熟へとむかう途上にあって、宗教、哲学、科学、政治、文学、音楽……、まさしく人間の知的活動の全域におよび、それぞれその名を歴史に刻まずにはいなかったこうした人びとの育成に、イエズス会はその独自の教育活動をつうじて大いにあずかったのである。とりわけ近代フランス文学史においてみとめられるその歴史的意義は、20世紀後半にロラン・バルトがこういって指摘したとおりだろう。

> 知られるように、イエズス会士たちは、文学なるものについてわたしたちが抱く理念を形成するのに多大な貢献をした。旧体制下のヨーロッパにおいて彼らがいわば専売権をえた教育をつうじてラテン的レトリックの相続者かつ伝播者となったことで、イエズス会士たちは、ブルジョワジーの支配するフランスに“よく書く”という理念を伝えたのであり、またその“よく書く”という理念の弾劾が、文学的創造なるものについてわたしたちが心に描くイメージとしばしば折り重なるものとなっているのだ[12]。

まず気づくのは、バルトがイエズス会教育とレトリックをまるでひとつのものであるかのようにとらえて話をすすめている点である。ここでいわれているレトリックとは、そこにバルトが「ラテン的」なる形容詞を付与して暗示しているとおり、いわゆる「古典レトリック」をさしている。「古代ギリシア・ラテン伝来の古典レトリック」を、あえて「（古代）ラテン」への言及のみによってよしとしているのは、イエズス会がその教育課程の全体にわたって、他のどの言語にもましてラテン語の完全習得をめざす強化プログラムをくみ、そのようにして完璧に習得されたラテン語運用力を前提として各種高等専門教育を生徒たちにさずけていたからだろう。もちろんギリシア語も必修ではあったが、ラテン語とくらべたらその重要度は格段におちるといわねばならない[13]。たとえばデカルトはイエズス会学校寄宿生時代、ギリシア語学習にはさほど熱心にとりくまなかったようで、晩年、クリスティナ女王の招きでスウェーデンにわたったさいには、女王のギリシア語教師たちを前に「ギリシア語なんてすっかり忘れてしまった」と得々と話し、彼らを嘆息させたらしい[14]。ともあれ、そうしたラテン語最優先の教科課程において、読む、書く、話す、すべての面での完成がめざされたわけだが、日々の授業のなかでとくに重点がおかれたのは、「書く」ことだった。より正確にいえば、「正しいラテン語で“よく書く”」こと、これをめざして編まれた強化カリキュラ

ムのなかで、教師と生徒が教室でまさに一丸となってさまざまな作文演習にとりくむことが奨励されていたのであり、そのきわめて詳細かつ具体的な演習内容は『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の随所にみられるとおりである。そしてそのとき「正しいラテン語で“よく書く”」ために、会をあげてのバックアップをうけたのがレトリックだったのであり、イエズス会教育におけるこのレトリック教育の役割の重要さが、まさにルネサンス人文主義の遺産をうけつぐものとして特別な意味をもっているのである。

一般に「ルネサンス人文主義」といったとき、それはそれに先立つ「中世」という時代を永らく覆っていたある種の知的風土にたいする強烈なアンチテーゼであると理解される。中世を「無知」の「闇」に覆われた「野蛮」で「ゴチックな」時代だとする一連の罵倒文句が、いずれも「人文主義者（ユマニスト）」とよばれる人びとの口から発せられたものであったことを思い出したい。ヴァッラ（1407-1457）が、アグリコラ（1443-1485）が、エラスムス（1469-1536）が、ビュデ（1468-1540）が、ヴィヴェス（1492-1540）が、その精神的父たるペトラルカ（1304-1374）の理想と理念を、世紀を超えてつぐものとしてあらわれ、「人文主義（ユマニスム）」とよばれる知的革新運動の推進役を買ってでたさいに、それぞれ異なる流儀のもとに共有していた願いのようなものがある。中世とよばれる時代が数世紀をへていよいよその末期に達していたころ、学芸のすべては硬直し、空疎な慣習のみが公のものとして大手をふり、言葉も思考もその本来の姿を失ってしまったかのように、ユマニストたちの目には映っていたのだが、そうした、いわば時代の病への処方箋として、彼らは異口同音に「古代ギリシア・ローマの源泉への回帰」を唱えたのである。ひとたび洗練の極みに達しながらいつしか失われた古典古代の言葉と思考の美への憧れがユマニストたちの熱狂を生み、中世の伝統はその美を覆い穢した張本人とみなされて、そのことごとくが彼らの非難の矢面にたたされた。なかでもスコラ哲学・神学の伝統がもたらしたとされるかずかずの学問的悪弊には容赦がなかった。スコラ学における弁証術（ディアレクティック）的思考手続の極度の形式化――三段論法（シロジスム）に代表される――や、古典古代の規範を忘れたスコラ学者の“まちがいだらけのラテン語 le latin de cuisine”は、しばしばユマニストたちの痛烈な諷刺と戯画の対象とされることだろう。

そしてこのディアレクティックの濫用のはてにわずらっていた中世末期スコラ学者たちの言葉と思考の病の治療薬として、ユマニストたちが一様に頼みとしたのがレトリックであったという事実は特筆にあたいする。“よく言う技術”、ないしは“説得術”の名のもとに、古代ギリシア・ローマにおいてはやくも、人間言語の使用技術にかんする一体系としてまとめあげられていたレトリックは、人間言語の美的な使用を希求するユマニストの心性と感受性にことさら強く訴えかけた。もっといえば、なによりレトリックは純然たる古典古代の産物であっただけに、このルネサンス期のユマニストたちを前に輝きをいや増してあらわれたのであり、だからこそそのユマニストにとってレトリックは、先代の堕落した言語使用と思考癖を叩きうち、晒しものにするための恰好の武器となりえたのである。

レトリックの規範にかなった美的な言語の使用にたいするこうした特別な関心とともに、ユマニ

ストたちの多くは、教育にかんする理論的著作の執筆や実践的考察へとむかった。アグリコラ、エラスムス、メランヒトン（1497-1560）らは、レトリック学習を合理化して当時の教育の刷新と発展にはたらきかけることで大教育理論家としてもその名をヨーロッパ中にとどろかせた。そもそもそこで拠りどころとされたのは、キケロの『弁論家について』を代表とする古典レトリック理論書であり、また、学校向けマニュアルとしてその実用性が買われていた『ヘレンニウスに与えるレトリック』などであった。こうした人文主義的教育理論の錬磨とその現実への応用にともなって、ユマニストたちは積極的に教育の現場にも身をのりだし、ルネサンス期の市民社会においてその大半は教師として身をたてている。なかには王侯貴族の子息の家庭教師としてやとわれたものも少なくなく、そうした人びとは世俗の政治権力のかたわらにあって、直接間接に現実政治の舵とりに関与する機会をえた。そんななかやがて「ユマニスト」という呼称は、別してギリシア・ラテン古典文学語学の教師および生徒にあてられるようになる。じっさい現実の学校教育の文脈で「ユマニスト」といわれたとき、まずこの狭義においてとらえられる(15)。

ルネサンス人文主義とレトリックと教育は、こうしてたがいに特別な同盟関係におかれるのだが、ここでさらに西欧教育史全体を視野に入れたとき、伝統的にレトリックがとくに教育という分野に深いかかわりをもつものであったという点もあわせて銘記しておくべきだろう。古代ギリシア・アテネにおいてプラトン哲学とイソクラテス弁論術がそれぞれ学問的に相対立する二大陣営を形成しながら、いずれも若者の教育に益することを少なからず目的としていたように、レトリックはもとより哲学ないしそれに準ずる学問分野との敵対関係におかれ、教育の舞台においてもまたその哲学とつねに覇権をかけて争うのである。概して中世初期までは、レトリックは厚遇されていたといえる。アリストテレスによってひとたび理論的完成をみたレトリックは、そのまま古代ローマのキケロやクィンティリアヌスといった人びとにひきつがれたが、彼らの主要著作はいずれも“よき弁論家”の養成 formation をねらいとしていた。また、中世初期にはレトリックは、いわゆる「自由七学芸 les arts libéraux」の「前期三学科 *trivium*」を構成する一学科となり、「後期四学科 *quadrivium*」とともにのちに中世大学教科課程に正式に組みこまれ、教育の分野では完全な市民権をえる。が、にもかかわらず、ほどなくしてその冠を永年の敵たる哲学――正確には、哲学および論理学と手を結んだディアレクティック――にあけわたすのである(16)。その後のなりゆきはフランソワ・ド・ダンヴィルがこう説明するとおりである。「レトリックは、中世の学校では無視されていたにひとしかった。大学の“例外”授業、すなわち二次的授業のうちにかぞえられるにすぎなかった」(17)。

したがってイエズス会教育における文学的ユマニスムについて語ろうとするとき、西欧ルネサンス期の学校の方々でみられたレトリック教育の歴史的復活（ルネサンス）を考慮することが不可欠となる。イエズス会創設にかかわった初期の修道士たちは、ロヨラをはじめとする全員がパリにて修学にはげんだが、そのとき彼らが身をひたしていたのは、この特別な文化・学問環境のなかにあった 16 世紀前半のパリ、ルネサンス人文主義思想がすでに根をおろしていたパリであった。このパリでの勉学をつうじ、他のだれよりもロヨラが「人文学」の有用性に気づいていたことについては前述したと

おりである。そこでのロヨラの洞察は、人間の思想と言語のあいだにある緊密な関係の本質をつくものだった。つまり、あらゆるすぐれた思想は、より適確な言語表現とともにこそあるという洞察である[18]。じっさい彼の代表作『霊操』は、パリで学んだ人文学、哲学、神学をつうじて、みずから味わった深い宗教的神秘体験をひとつの宗教思想として正確に表現するすべを得たうえになったものであるといわれる[19]。「哲学をはじめるまえにレトリックを学ばなければならない」と各処で明記し[20]、それを実践にうつすための具体的な学習プログラムを提供している『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』は、このロヨラの根本思想を忠実にうけついだものである。

『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』のなかには、ここまで縷々述べてきた意味での「ルネサンス人文主義」の伝統とそれ以前の中世スコラ学の伝統とのみごとな総合がみられ、その内実は「ディアレクティックと論理学にたいするレトリックの勝利」[21]と要約されうる。これは同時に哲学研究のうちに文学研究の方法と成果が大幅に浸透したことのあらわれである。たしかに哲学研究はルネサンス期の学校修学課程の序列においても文学研究にたいして上位におかれてはいるが、それは文学研究の支えなくして哲学研究はたちゆかないとの理解のうえで、文学研究が哲学研究にあくまで順序の面で先におかれた結果である。この序列ないし順序はイエズス会『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』においても明確に踏襲されている。その教科課程は「下級クラス」（別名「文学級」）と「上級クラス」（別名「哲学級」）の二層構造をなしており、前者においては5年間で文法、人文学、レトリックが学ばれ、3年間で論理学、自然学（数学含む）、形而上学（道徳学含む）が学ばれる。そしてこの「下級クラス」の最上位に位置するレトリック学級が､上下両クラスを有機的に結ぶ蝶つがいの役目をはたしているのである。『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』に記されてあるとおり、レトリック学級での最終目標は「完璧な雄弁」[22]を全生徒にさずけることにあり、それを到達点とする「下級クラス」での学習は最下級の文法学級からすでにレトリックを強く意識した内容となっている。そしてこの「下級クラス」の5年間で習得された「完璧な雄弁」を基礎として、その後3年つづく「上級クラス」での学習へとひきつがれるのである。以上から、『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』のうちにレトリックの理想がゆきわたっているさまが興味深くみてとれるだろう。

デカルトが10代のほぼすべてをすごしたラ・フレーシュ学院は、この『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』1599年決定版が、フランスで初めて実地で適用されたイエズス会学校であるという[23]。さらに17世紀前半はイエズス会教育史上、同会設立の学校がどこも『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の諸規則にもっとも忠実であろうとつとめた時代であるとも特徴づけられる[24]。こうした教育環境のなか、少年デカルトはラ・フレーシュ学院で『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の過密な学習プログラムをどうこなし、それをどう評価していたのだろうか。以下、デカルトの書き残したテクストをつうじ、この問いに可能なかぎり具体的に答えたい。

デカルトと「文字による学問」

『方法序説』の導入部をなす語りを終えるや、デカルトは同著作「第 1 部」の本題の記述に入る。そこでは彼が少年時代に専念した学業一般についての個人的感懐、および所見が伝えられる。

> わたしは子どものころから文字による学問で aux lettres 養われてきたのだが、それも、それによって人生に役立つあらゆることについてなにか明晰で確実な知識を獲得できるとみなから説き聞かされていたため on m'a persuadait、それを学びたいという強烈な願望 un extrême désir de les apprendre を抱いていたのである。だがそれを終えれば学者の列に加えられるのが習わしであるこの学業の全課程を終えるや、わたしはまったく意見を変えてしまった。というのも、多くの疑いと誤りに悩まされている自分に気づき、勉学に努めながらも、ますます自分の無知を知らされるばかりで、それ以外にはなにも得るところがなかったように思われたからである(AT, VI, 4-5)。

あらゆる学問、万巻の書を前にその無益を嘆く“ファウストの夜”にも喩えられる有名な一節だが、ここでデカルトの嘆きの対象となっているのは、同じあらゆる学問でも「文字による学問」である。この「文字による学問」が少年デカルトにあたえた失望の大きさは、「それを学ぶことへの強烈な願望」に先立たれていたといわれていることからも推量されよう。そもそもそのような「強烈な願望」を抱くようになったのも、幼少時に彼の身辺をとりまいていた大人たちによってことあるごとに、実人生において「文字による学問」を学び修めて得られる知識の重要性と有用性を諄々と「説き聞かされていたから」だという。まわりの大人たちに説得されるまま、幼い彼は、まさにその「文字の学問」の教授において当時「ヨーロッパ随一」(AT, VI, 5) と聞こえていたイエズス会ラ・フレーシュ学院に入学し、卒業まで 8 年半ものあいだ孜々として勉学にはげむ。ところがそこから彼が得たものといえば、あらゆる知識への「疑い」とその知識自体の「誤り」と「自分の無知」の認識ばかりであったという。聞かされていた話とはすべてが逆に進む現実に不審をつのらせるいっぽうのなか、学院を卒業するころには入学前とは「意見を百八十度転回」し、「文字による学問とは完全におさらばする」(AT, VI, 9) との決意をかためるまでになってしまう。

問題はこの「文字による学問」なるものの実態である。試みにジルソンの『方法序説：テクストと注釈』を開いてみる。ジルソンはそこで「文字による学問によって aux lettres」という表現を「人文学によって *litterae Humaniores,* aux Humanités」と読み替えるべきであるとし、「この語（＝ les lettres）はここでは、文法、歴史、詩、そしてレトリックを指す」[25]、と説明している。がしかし、当の『方法序説』を読み進めるにつれ、事情はこのジルソンの注釈とだいぶ異なっていることに気づく。というのも、デカルトが『方法序説』「第 1 部」にて、「文字による学問」がカバーするものとして次々に列挙する教科は、ジルソンの挙げる 4 教科をはるかに上回っているからである。デカルトがリスト・アップしている教科は、次のとおりである。文法、寓話、歴史、詩、レトリッ

ク、論理学[26]、数学、道徳学、神学、哲学、および秘伝的学問、さらに法学、医学。律儀にもデカルトはここで、自分が学校でそれらを学んだ年代順（クロノロジー）にそって語りを進めている。そしてこの年代順（クロノロジー）という秩序にみずからおいた各教科について彼自身がくだす好意的評価と批判的評価をそれぞれ交互に提示していくのである。注目すべきは、この語りの順序があの『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』にみられる教科課程の内容と順序をほぼ正確になぞっている点である。これに即してデカルトの教科リストを整理すると、文法、寓話、歴史、詩、レトリックは「下級クラス」の学習内容に、論理学、数学、道徳学、哲学は「上級クラス」の学習内容にあたる。神学はこの上下両クラス全課程修了ののち、さらに 3 年から 4 年かけて修得されるものであった。

ただここで、「下級クラス」に入れた「寓話」と「歴史」と「詩」の位置づけと意味にかんする若干の説明が必要だろう。というのもこの三つには、『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の目次を見ればわかるように、それぞれ独立した学科ないし学級の地位はあたえられていないからである。先ほど一瞥したが、ここでもう一度、「下級クラス」において「文法学級」と「レトリック学級」のあいだに「人文学級 la classe des humanités」と呼ばれる学級がおかれていたことを思い出したい。この中間学級は「第二学級 la seconde」ないしは「詩学級 la classe de Poésie」とも呼ばれるのだが[27]、とはいえ、文法学級やレトリック学級のように、その名によってそのまま学級の学習内容を特徴づけうるものではない。『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』では、人文学級の本旨は「文法学級を終えた生徒」に「雄弁の土台を準備」させることにあるとされ、その実現のために「言語の知識、相応の博識 une certaine érudition、レトリック規則にかんする簡潔な情報の提供、の三段構え」で臨まれるといわれているのだが[28]、そこで要求される学習内容は、じつのところレトリック学級のそれとほとんど区別がつかない。「詩学級」との別名をもつとはいえ、それほど詩の学習に専念するわけでもないのである。「雄弁の土台を準備」するとの定義のとおり、この人文学級は、あくまでひとつ上のレトリック学級の準備に役立つあらゆるリソースを提供する場なのである。じっさいには、「言語の知識」を補完するために授業中は文法事項への配慮がおこたられることはなく、「相応の博識」の獲得には「歴史」がその任にあてられ、「レトリック規則」に準ずるものとして韻律学や「詩」が学ばれる、といった具合である。いっぽう「寓話 les fables」は、「歴史 l’histoire」の学習――人文学級で本格的にはじまる――を準備するものとして、おもに文法学級の上級クラスで学ばれた[29]。なお『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』においては、つねに韻文よりも散文の学習により大きな比重がおかれていることにも着目したい[30]。

「秘伝的学問 les sciences curieuses」にかんしていえば、通常これはフュルチエールの『汎用辞典』にみられる記述をもってその定義とされる。すなわち、「ほんの一握りの人びとにのみ知られ、特殊な秘法をそなえた学問」[31]の謂であり、具体的には占星術、錬金術、手相術、光学的魔術、カバラといった、いかにもルネサンス的な魔術的学問の面々がそこにならぶ。デカルトは課外でこれらの書物を、「手にはいるかぎりすべて読破した」という（AT, VI, 5）。しかし、概して書物統制の厳しかったイエズス会学校において、このデカルトの例はむしろ例外に属するものだったととらえるべきだろう。そのような例外が許されたのにも訳がある。デカルトはラ・フレーシュ学院生時代、

授業中はたいへんまじめで従順で、課題には熱心にとりくみ、宿題提出もおこたらずといった優等生ぶりを発揮していたそうだが[32]、それでいて彼のうちにはすでになにか特別な批評感覚がみとめられたらしい[33]。そのため彼は教師のあいだではたいへん評判がよく、信頼も得ていた。上のような魔術的学問にかんする書物に近づく自由をあたえられたのも、こうした学習態度と素質を評価されての特別待遇であったようである[34]。少年ルネはおそらくラ・フレーシュ学院寮の個室で、ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタ[35]をはじめとするルネサンス魔術書にひきこまれながら、つねにそこに鋭い批評眼をはなつことを忘れず読みふけったのだろう。

また「法学」と「医学」だが、この二つは当時、イエズス会学校では教えられていなかった[36]。イエズス会学校はいまのフランスでいう中等教育 enseignement secondaire をになうことを趣旨としていたのにもまして、折から対立していたフランスの大学の反対によって 1628 年まで高等教育学位授与権をあたえられていなかったのである[37]。したがってデカルトの修学当時、法学や医学といった高等専門科目を修めるには大学に行かねばならず、デカルトもポワチエ大学でこの 2 科目を学んだ。とくに法学では 1616 年 11 月 9 日および 10 日に同大学で、バカロレアと学士の学位を取得している。

以上から、デカルトのいう「文字による学問（レ・レットル）」とは、文字（レットル）によって書かれてなる学問のすべて、すなわち、書物のなかに見出されうるありとあらゆる学問をさしていることがわかる。そこでは現在のような文系・理系の区別はなく――このような学問分野の二極化は 19 世紀以降に一般化したにすぎない[38]――、数学も自然学も医学もその内容・知識が文字（レットル）＝書物をつうじて伝えられるものであるかぎりにおいて、文法や詩やレトリックとひとしなみに「レ・レットル」として括られる。また、つねに複数形におかれるこの「レ・レットル les lettres」という表現は、ラテン語の« *litterae* » を敷き写した翻訳フランス語である。ここにはまさしくルネサンス・ユマニストたちの憧憬と信仰の対象であった“書かれたもの”のうえに築かれたひとつの伝統の影、いいかえれば、古典古代の著作家が遺したありとあらゆる“書きもの”を礎とするひとつの知的文化としてのルネサンス人文主義の影が色濃くおちている。この意味で、デカルトが「レ・レットル les lettres」といったときには必然的に、そのバックボーンとしていわゆるラブレー的博識をその極致とするルネサンス百科全書的文化――字義どおりには「全般的 encyclo-教育-pedia」――が想起されるのである。ファウスト博士の失望の対象は、哲学と法学と医学と神学という、中世大学の頂をなしていた四大学問だったが[39]、それに対してデカルトの失望の対象は、中世の学問文化を否定的に吸収して再構築されたルネサンスの総合的人文教育文化だったといえるだろう。

『方法序説』「第 1 部」は、このような意味での「文字による学問（レ・レットル）」から得られた知識および見識のすべてを最終的に完全に放棄するにいたる理由がデカルトの手で一行また一行と書き連ねられ、やがて積みあがったその理由の山が同じデカルトの手で一気に根底から突き崩される過程が描かれることによってなっている。そしてこのようなかたちで「文字（レ）＝書物（レ）による学問（レットル）」を否定した若きデカルトが次なる探求の対象とするのは、「自分自身 en moi-même」および「世間という書物 le

livre du monde」（AT, VI, 9）なのである。いずれも文字によって書物に書かれてはいない世界、書斎でどれほど多くの書物を読んでもけっしてわかるようにはならない世界である。そこでこの新たな未知なる世界に近づくための手だてとしてデカルトが選んだのが、「旅」であった。そしてまた、「旅」をすることで少なからず身近となる世界の真の意味を汲むために彼がなにより信をおいたのは、「旅」をつづけるなかで否応なく自分自身のうちに重なる「経験」であった。「旅」から得られたみずからの「経験」を元手に、デカルトは、みずからの外に広がる「世間という書物」を、既存の書物に一切たよらず読んでいこうとするのである。そうやってこの「世間という書物」に「丸 9 年」（AT, VI, 28）もの時間を費やしてひととおり目をとおしたあと、こんどはオランダに居を移して「8 年」（AT, VI, 31）ものあいだ「孤独で隠れた生活」（*Ibid.*）を送りながらひたすら「自分自身」のうちを見つめつづける。その孤独な省察のなかでデカルトはいよいよ自分がずっと夢みてきた新しい学問＝哲学の建設に身をのりだすのだが、そのとき彼が自分の思索の建材とするのが、みずから最初にかなぐり捨てたあの「文字（レットル）」なのである。

前人未踏の地をゆくものとして知られるデカルトの新しい学問＝哲学は、いまだだれにも書かれていない世界を、他のだれでもないデカルト自身が文字をもって書き、それを書物として世に問うことのうちに初めて姿をあらわすたぐいのものであるといっていい。根本的な言語不信の上に立つはずのデカルト哲学[40]は、こうして、同時にその哲学が不可避的に「書かれるもの」であるということ、もっといえば、つねにそれが「書くこととともにある」という決定的逆説のもとにある。“明証の哲学者”デカルトの思考の営みとの関連のなかで「書く」という行為になにか特別な役目をあたえることは、ともするといささか無理があるように思われるかもしれない。が、そのいっぽうで殊に「書く」ことにかけては、デカルトは良くも悪しくもあのイエズス会ラ・フレーシュ学院で、その少年期の大半を費やして“よく書く”ための猛訓練を積んでいる。たとえ「文字（レ）＝書物（レット）による学問（ル）」をすべて放棄したのだといっても、イエズス会学校仕込みのこの「書くこと」への傾注は、おそらくすでに彼の身体の一部となって、デカルトがみずからの思考を紙の上に書きつけようとするたびに、いやがうえにもそのペンをもつ手に甦ってきたのではないか。

このような仮説のもと、それでは哲学を学ぶために、あるいはみずから新しい哲学を樹立するために、デカルトがどれほど「書くこと」を重視していたか、そしてそれはじっさいにデカルトにおいてどのようなかたちで実践にうつされているのか、こうした問いに答えることを次節の考察の趣旨としたい。そのさい必要に応じて『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』のテクストを参照し、少年デカルトも生徒のひとりとして参加していたと想定されるイエズス会学校作文演習の授業をのぞくことで、デカルトにおける「書くこと」の理念と実践との類縁関係をも同時にさぐってみたい。

書きつづけること――監視と競争を越えて――

子どもの教育について、正確には子どもにさずけるべき哲学教育について、デカルトが個人的意見を述べている非常に興味深いテクストがある。それはデカルトが 1638 年 9 月 12 日に数学者のフロリモン・ドゥボーヌに宛てたとされる手紙である[41]。デカルトは前もってこの友人ドゥボーヌからその息子が通うにふさわしい学校選びについて助言をもとめる手紙をうけとっていた。ここでとりあげるデカルトの手紙はそれへの返事というかたちになっている。

> あなたの息子さんの教育についてこのわたしの意見を知りたいといっていただけるとは、このうえない光栄です。息子さんのご人格形成においていくらかお役にたてればとの願いゆえ、もしも息子さんのご学業についてあなたがおもちのご計画がこの界隈で果たされうるとわたしが考えておりますなら、息子さんをこの界隈に寄こされる気でおられるあなたに水を差すようなことを口にするのはなるべく避けたいのですが、しかし、哲学はこのあたりでははなはだ不適切に教えられているというほかありません。教師たちは 1 日に 1 時間、つまり 1 年の半分はただ一方的に喋りたてるだけ、ディクテもなければ、もちろん筆記訓練など皆無で、決まった時間に授業を終わらせることもまずありません。このような次第で、いささかなりとも哲学について知識を得たいと望む人びとは、官職に就くことを望む場合にふつう人が法律を学ぶためにフランスでするように、個別にだれか教師について知識をつけてもらわざるをえません。ところで、哲学で教えられることがすべて福音と同様に真だというのがわたしの意見ではないのですが、けれども、哲学は他のさまざまな学問の鍵ですし、思うに、イエズス会学校で教えられているああした仕方で哲学課程全体を勉強することはたいへん有益です。そのあとに息子さんの精神を学者的衒学（ペダントリー）のさらに上に高めることに着手され、そうして然るべきかたちで学識を身につけられればよいのです（AT, II, 377 ; 強調筆者）。

この手紙を書いているとき、デカルトはオランダ北部のサントポールト Santpoort[42]という小さな町に住んでいたと推測されている。一方、ドゥボーヌは同時期フランスのブロワ Blois で生活しており、自分の息子をオランダの大学に通わせることも大いに視野に入れていくつかの選択肢を前に逡巡し、最終的にその一校を決められずにいたところ、友人のデカルトに知己の言をあおいだのである。オランダ北部にはユトレヒト大学やライデン大学といった有名な大学があり、そのオランダに移住して 10 年になろうというデカルトならばそちらのさまざまな教育事情につうじているだろうし、すでに『方法序説』を出版し哲学者としてその名を知らしめていたデカルトであればこそ、だれより信頼にたる意見を聞かせてくれるはずとの期待があっての相談だったのだろう。

心ならずもデカルトは、ドゥボーヌが多少とも期待を寄せていたオランダの大学に対してはまったく悪い印象しかもっていなかった。とくに不満だったのが大学における哲学の教授法であり、デカルトの目には大学の哲学は、17 世紀にいたっていまだ中世スコラ学臭を漂わせてよしとする、もはや硬直しきって惰性にまかせるだけの虚ろな慣習ばかりとうつっていたのである。そしてこの

大学の哲学との比較の対象としてデカルトがもちだすのが、イエズス会学校の教育方法なのである。「教師たちが一方的に喋りたてるだけ」との批判が、中世時代から延々うけつがれてきた大学での大教室講義 les cours magistraux を想定してのものであり、また、「ディクテもなければ筆記訓練もなく、決まった時間に授業が終わることもない」との不平は、まさしく彼が少年時代にラ・フレーシュ学院で送った、つねに制限時間下で課された作文練習に浸りきりの日々を想起してのものだろう。

デカルトはこうして当時のオランダの大学を厳しく批判するのだが、これはたんなるデカルト個人の見解にとどまるものではなく、またそもそも当時の大学の嘆かわしい堕落ぶりはオランダにかぎったことでもなかった。じつのところ「大学の危機」と呼ぶべき事態が、17 世紀ヨーロッパ全体を覆う一現象としてすでに深刻な状態にあったのである。そのころは、学生も教師も校紀の乱れに棹さす行いをこととともせず、放蕩、暴力、さらには学生間での奨学金の転売といった蛮行までもが、教師の完全放任主義のもと茶飯事と化していたという(43)。授業内容および教授方法については、前述のとおり、大教室で教師が一方的に弁じたて、生徒はもっぱらそれを聴いてノートをとるという中世以来の講義形態と基本的に変わりがなかった。フランスではアンリ四世がこうした現状を危機とみて、1600 年に大学教育改革法を制定して数世紀一日とでもいうべき大学の古い体質の改善を試み、そこでおもに筆記課題に重点をおくようにとの規定をおいたのだが、結局のところ、その量も質もイエズス会学校とはくらべものにならないレベルにとどまっていた(44)。

イエズス会学校は折からこの頽廃しきった大学の恰好の競争相手としての役を任じたのである。当時の大学における放任と無秩序のおよそ逆をゆくイエズス会学校新教育プログラムは、まさに厳格なる秩序と規律の適用と維持によって統制されている。まずは校内風紀の維持のためと、学校関係者総出で、たったひとりの生徒の無法も見逃さない厳格な「監視体制」をしいた。さらに、日ごとの授業進行に一定の秩序をあたえるための方策として、イエズス会学校独自ともいえる「競争原理」を各教室にはりめぐらせた。きわめてシステマティックに導入されたこの「監視体制」と「競争原理」の二つによって、イエズス会学校はみるみるうちに所期の目的を達成し、古典期ヨーロッパの教育市場を席捲していくのである(45)。

まずは「監視体制」についてだが、これはイエズス会学校のすべての生徒を原則的に同一条件におき、こうして各生徒間にいわゆる「平等」感覚をうえつけることによって遂行される。イエズス会学校における「平等主義」については、デカルトが同じドゥボーヌ宛の手紙のなかでこう証言しているとおりである。

> イエズス会士たちが生徒たちのあいだにおいた平等は、まさしく生徒の貴賤を問わずといったふうで、これは至極の良案といえましょう。彼らが親元で甘やかされるのに慣れてしまって、未熟さやその他の欠点をふりはらえなくなるのを防ぐのにもきわめて有効です（AT, II, 378）。

ひとたびイエズス会学校に足を踏み入れたが最後、すべての子どもは一律の監視下におかれ、身分の区別なく日常生活をともにしなくてはならない。あえて階級差をとりはらって強いられるこの慣れない共同生活に、子どもたちはみなさまざまな困難を感じたことだろう。が、デカルトも指摘するように、幼いころに味わうその困難こそが子どもの成長にはなにより有効なのである。そしてこの「平等主義」(46)を守りぬくべく、教師および学校職員らはそれぞれの役目において、四六時中ひとりひとりの生徒の行状を厳重に監視しなければならない。

いっぽうで、この監視体制が徹底されることによって、かえって「個人主義」という、「監視」とは一見かけ離れているかにみえる価値もまた同時に生じることになる。というのも教師を含めた全学校関係者たちは、この「監視」をつうじてまさに恒常的に生徒ひとりひとりの至近に身をおくことになり、大人たちはそうした至近距離からめいめいの子どもをじっくり観察することで、各自の性格、能力、適性、素質などを、個別に見きわめることが可能となるからである(47)。『学事規定(ラチオ・ストゥディオールム)』にはところどころ「生徒の能力を考慮すべきである」(48)とか、「生徒全員に従わせなければならないというわけではない」(49)といった但し書きがみられるが、こうした個別対応への特別な配慮は、学校の厳重な監視体制のなかでかえって教師と生徒のあいだに育まれる個々の信頼関係を想定してのものといえるだろう。いずれにしてもイエズス会学校では生徒たちを文字どおり24時間「監視体制」におくことで、彼らのあいだに「平等主義」と「個人主義」といった価値観を育ませながら、絶妙にも子どもたちを学校の生活規律に順応させていくのである。

加えてイエズス会学校では、授業のあらゆる場面で「競争原理」をはたらかせて、子どもたちが勉強に自発的にとりくむようにと仕向けていた。そうすることでおのずから、勉学の続行と遂行に必要な“内なる規律”を彼らのうちに確立させることを目指していたのである。具体的には、二人一組で生徒どうし答案をたがいに添削し合わせたり、「十人組 décurie」(50)という形態のもと敵味方にわかれて討論合戦をおこなわせたり、散文や韻文の優秀答案を掲示したり、聴衆を面前に朗読(レシタション)ないしは朗唱(デクラマション)をさせたり、優秀な生徒を称えるための表彰制度を念入りに整えたり、といったかたちをとってなされた。つまり、おもに語学の練習問題を子どもたちに次々と課し、彼らが答案を作成するあいだにゲーム的な要素をとりいれて発奮させ、またその答案に対する評価方法に工夫をこらしてさらに競争心をあおるといった具合である。イエズス会学校は受入生徒数が多いことでも知られており、17世紀初頭のラ・フレーシュ学院ではすでに1,200人の生徒をかかえていたというが(51)、その多数の生徒たちをこのような一種のたえまない競争ゲームに引きいれることで、いわゆる“マスプロ授業”につきものの弊害を巧みに回避していたといえよう。ミシェル・フーコーはこのイエズス会の授業形態を「二元的マスプロ構造」(52)と表現しているが、そこでは生徒全員を授業に自発的に参加させ、全員に相応の成果を得させるべく、教師たちはこの競争ゲームの指揮者であると同時に参加者として、つねに生徒たちに随伴する。教師と生徒のこうした双方向的やりとりのもと、学業進捗の面できわめて効率的な授業形態が確保されるのである。

別様にいえば、イエズス会学校はその創意に富んだ新しい教育方法をもって「平等」、「個人」、

「競争」といった近代的な理念を教育の分野で実践にうつすことに成功したともいえる。じっさいこれによって学校は生活と学習の両面からみごとな規律で統制され、それでいて子どもたちはそれを耐えがたい拘束ばかりとは考えずにいられる。先生たちはうるさくいいながらもいつもそばにいて自分を正当に評価してくれるし、授業中はこの「競争」の勝利者となるべく鎬を削り合いながら、友だちや先生といっしょにそのゲームにうち興ずることができる。

そしてこの「競争」システムを現実でうまく機能させるためになくてはならない役割をはたしているのが「文字 les lettres」なのである。イエズス会学校がルネサンス人文主義をその教育プログラムの土台にすえて近代初頭にあるべき教育改革の手本をしめしたことは先にみたとおりだが、この人文主義の理念に沿い、子どもたちに模倣させるべき「良き学芸 les bonnes lettres」の見本としてイエズス会教師たちが授業中に使用していたのがもっぱら古典古代の著作物 les écrits であったことをふたたび思い出したい。

授業のじっさいの内容をみてみよう。まず大教室で教師がおおぜいの生徒たちを前にある一定の時間内で「前講義 prélection」[53]をおこなうことからはじめられる。このプレレクションは、教師がラテン語ないしはギリシア語のテクストを読みあげ、翻訳し、要約し、説明する、という一連の流れをもち、その目的は、教師が教室で生徒にひととおりの必要な知識をさずけることにある。たとえばレトリック学級のプレレクションは次のようなかたちでおこなわれる。まず教師がその時間にとりあげるテクストを読みあげ、全体を翻訳したあと、そのテクストの作者の伝記をおおまかに紹介し、テクストの属するジャンル、テクスト全体においてみられるレトリック技術のアウトライン、序 exorde で駆使されているもろもろのレトリック、そして本文中にみとめられるさまざまなレトリック技術について、ほぼ一字一句にわたって注釈を加えるといった具合である。このあと、教師はプレレクションの内容にもとづいて生徒にさまざまな作文練習問題を課すことになる。「競争」システムは、まさにこの作文練習の段階で適用されるのである。生徒は各自つねに先生と級友の眼下におかれ、競い合いながら文章を練りまわす。たとえ先生が答案を添削しているあいだでも、下の引用にあるとおり、生徒はなんらかのかたちで「書きつづけ」なければならない。

> 教師が生徒の作文の課題を添削しているあいだに生徒にあたえられる練習は、たとえば次のようなものである。ある詩人ないしある弁論家の一節を模倣する練習。庭園、寺院、雷雨、その他それに似たものを描写する練習。ある同じフレーズをさまざまに書き替える練習。ギリシア語の演説をラテン語に翻訳し、またその逆をする練習。ある詩人の詩行を散文に置きかえる練習（ギリシア語とラテン語ともに）。一編の詩をあるジャンルから別のジャンルに書きなおす練習。寸鉄詩、碑文、墓碑銘小詩文をつくる練習。ラテン語ないしはギリシア語の良質の弁論家の文章から一節を選りぬく練習。レトリックのさまざまな文彩を規定の主題に適用する練習。レトリック的文章や諸論点（トポス）から任意の問題に役立つ論拠を引きだす練習。その他、こういったたぐいの練習である[54]。

こうした作文練習はここで引いたレトリック学級の授業においてだけでなく、レベルの差はあれ、

「文法三学級（上中下級すべて）」や「人文学級」の授業においてもおこなわれていたのであり、少年デカルトもまたラ・フレーシュ学院の教室では級友との不断の競争状態におかれて、上のような作文練習問題に日々とりくんでいたのである。アドリアン・バイエは少年デカルトの授業中のようすを次のように伝えている。

> 5 年半にわたったその人文学の全授業課程[55]において、周りのものは、幼き氏のうちに傑出さを装うところはちらりとも看取しなかった。もっとも、競争心はどうしても他に抜きん出ようとの気をおこさせる。まさしく競争心をもってデカルト氏は、他を凌いでいた級友たちのそのまた級友をさらに後方に退けていると自負していたからである[56]。

バイエのこの文章は、デカルトの『方法序説』中にみられる次の言葉を念頭においてのものと思われる。

> わたしは他の人たちが自分をどう判断しているかも知っていた。級友のなかにはすでに先生のあとを継ぐよう決まっている者も何人かいたが、わたしが彼らにくらべて劣ると見られているとは思わなかった（AT, VI, 5）。

一読しただけでは、そのどこかもったいぶった自賛ぶりが目につくが、ここまでイエズス会学校の教育システムをある程度詳細にみてきたかぎりでいえば、デカルトのこの文章はけっして彼のたんなる主観にもとづいて書かれたものではないことがわかる。おそらくデカルトはラ・フレーシュ学院で、常時競争状態におかれたすべての授業において、常時他人との比較のなかにおかれていたのだろう。とりわけ学業成績は、なんらかのかたちでつねに人目に晒される状態にあったため、自分が仲間たちのあいだでどのあたりに位置づけられているかは、否応なく客観的に知らされていたにちがいない。「書くこと」と「他人の目」の関係については、『方法序説』「第 6 部」にみられる一節がとりわけ示唆的である。

> 多少とも自分が重要だと判断することはすべて、その真理の発見に応じて書きつづけること、しかもそれも印刷させようとする場合と同じくらいの注意をかたむけて書きつづけることが本当に必要なのであって、それはひとつには、それらをじゅうぶんに検討する機会をそれだけ多くもつためで、それというのも多くの人に見られるにちがいないと思うものについては、自分のためだけに書いたものよりもいっそう丹念に見ることはたしかだし、またしばしばものごとは、考え始めたときには真実に見えても、紙の上に書きとめようとするときには虚偽に見えたりするからである（AT, VI, 65-66 ; 強調筆者）。

「書くこと」、さらには「書きつづけること」の重要さ、および、自分が書いたものをつねに「他人の目」で見るよう努めることの重要さ、デカルトがこうした点に早くから気づいていたとするな

ら、そうした認識のいくぶんかは、学校時代に先生や級友とともに打ち込んだこの作文競争に由来しているのではないだろうか。

ところで、ここでデカルトが「印刷させようとする場合と同じくらいの注意をかたむけて」と書いている点にとりわけ注目したい。じっさい異常なまでに几帳面でだれの目にも読みやすい彼の筆跡は、1638 年 8 月 23 日付メルセンヌ宛手紙の手稿をつうじてすでに広く知られるところだが[57]、概して宛名人以外の他人に読まれることを前提に書かれた 17 世紀当時の手紙のみならず、デカルトは、とくに出版の見込みのないものも、またおそらくはほとんど下書きに近いものでさえも、変わらぬ丹念さをもって書きしたためていたであろうことが、上に引いた文章からうかがえる。つねに他人の目を意識して書くこと、それがいつだれの目に触れどこで印刷されてもかまわないといえる状態をめざして書きつづけること、――デカルトはものを書くさいにはいつでも自分にそうした入念さと注意深さを要求し、そしてそれを日ごろ実践することで、紙の上に書きつけるたびに姿を変えてあらわれる頼りない自分の思考を自分の目の前に晒しおき、まるで他人の文章を検討するかのような厳しい目つきでそれらを見つめつづけていたのではないか。またそのときの彼のまなざしには、学校時代の作文練習のさいに先生や級友たちによって自分の文章がさまざまに異なった角度から眺められ、その出来不出来が量られた記憶が甦ってきていたのではないか。

デカルトの書くことへの執着は、印刷技術 les techniques typographiques そのものに対するその並々ならぬ関心と注意によっても確認される。次に引用するのは、『方法序説』の原稿が印刷所に送られる直前に、メルセンヌに宛てて書かれた手紙の一部である。

> わたしの原稿はこの手紙同様にうまくは書かれておりません。綴りも句読点もわたしの手書きにすぎず、つまり、非常に下手に書かれています。ですので、もしあなたのほうで、そうした綴りや句読点をもとにテクストの理解を得て、あとで製版者にそれらを解きあかしてくださっても、おそらく製版者にはそれらを理解することはできないでしょう。それはそうと、原稿をすべて非常に美しい活字で、非常に美しい紙に印刷してもらえ、さらに出版社からわたしに少なくとも 200 部いただけるなら、たいへんうれしく存じます。それらを多くの方々にお配りしたいのです（AT, I, 339；メルセンヌ宛、1636 年 3 月、ライデンにて；強調筆者）。

印刷術がルネサンス人文主義思想の伝播のさいに果たした役割の大きさを理解することはすでに歴史の常識に属するが、ルネサンス文化を乗り越えんとする 17 世紀の哲学者が、自分の著作の印刷方法についてこれほど口やかましくしているさまにはことのほか興味がひかれる。17 世紀ともなれば、前世紀とくらべて印刷技術もだいぶ進歩していたことだろう。その進歩した技術を前にあらわにされたこのデカルトの細心さにはいささか驚かされる。じじつこのデカルトの目にはどんなに小さな誤植も許しがたいものとうつる。1641 年 6 月 23 日付メルセンヌ宛の手紙で彼はこう書いている。

誤植について申し上げますと、紙が綴じられてしまう前に、そのすべての紙の上で誤植を手で訂正することもできるように思います。訂正のための費用はわたしがもちますので。それから、その版で何部刷るのかも教えていただければ光栄です。といいますのも、それがほんのわずかの部数で、かつ、そのあとに第2版を刷るというのであるなら、第2版をはるかに正確にすることは容易だろうからです（AT, III, 388）。

誤植だらけの著作が出回るくらいなら、その訂正費用を自分がもつほうがましだとデカルトはきっぱりという。ひとつ前の引用文中でデカルトが懸念しているように、たったひとつの綴りの誤植、さらには、たったひとつの句読点の誤植のせいで、テクストの意味内容は一変しうるし、その結果、読者のあいだにはあらぬ誤解を招き、学者のあいだには無益でたえまない論争の種をまく。論争をことのほか嫌悪するデカルトにはそれはなにより耐えがたいことだった。とはいえ、いずれにしても誤植は避けられないものと承知していたのだろう、上の引用にあるとおり、デカルトはせめて重版のたびに印刷状態が改善されるようにと、そのための方策まであらかじめ練っている。

さらに指摘せずにいられないのは、印刷技術に向けられたこのデカルトの特別な注意と関心のうちに、彼の特殊な美意識までもが顔をのぞかせている点である。自分の著作が「非常に美しい活字で、非常に美しい紙に印刷される」ことをデカルトは切に願うのだが、これにいたってはもはや完全に実益の域をこえている。「多くの人に配りたいから」と彼はいうが、ここでは印刷をつうじた正確な思想伝達の重要性にもまして、文字そのものの形態や、それが印字される紙の質などといった極度に物質的な側面にまで神経が使われている。自分の著作が内容と形態の両面において文字どおり最良の状態で他人の眼下におかれることを、デカルトがいかに強く望んでいたかがこれによってよくわかる。

ところで、書かれたもののあらゆる形態的側面の正確さと美しさにこだわるデカルトのこうした感受性を、彼のもって生まれた個人的性質とかたづけてしまうことははたして妥当だろうか。速断する前に、『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』中の次の一節をみてみたい。ここにはイエズス会教師が生徒をその作文課題の出来不出来によって順位づけ、賞をさずけるさいに参照すべきとされた判断基準が羅列されている。

（生徒の作文答案を）判断するさいには、ほかの何よりも、より長く書かれているものよりも、まずは文章の形式面でより優れたものをとること。答案が様式と文体の面で同レベルの場合には、短いものよりも長いものをとること。それでも同レベルの場合は、綴りの正確なものが勝者となる。綴りその他の面でも同レベルの場合は、筆跡がより優雅なものに賞をあたえること。すべての面で甲乙つけがたい場合は、賞を分け合うか、賞を倍に増やすか、あるいは抽選で決めること（強調およびカッコ内筆者）(58)。

すなわち、作文課題でより多くの点数を手っとり早くかせぐには、文章の形態面に意を注ぐのが

勝ちというわけである。答案は長いだけでは意味がなく、文体・様式の優れたものがよく、できれば綴りは正確で、筆跡はより美しいほうがいい。あらゆる形態的側面から各答案を比較してみて、それでも優劣がつけられない場合は、究極的には「抽選」という手段に訴えることも辞さないという。最終的な勝敗はこうして、いつなんどき完全な運の世界にゆだねられてもおかしくない状態におかれている。

もちろん、デカルトの学校時代の経験のすべてを『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』の内容に帰着させてしまっては危険だし、成人したデカルトにみられるある種の傾向を、彼が少年時代に味わったと推測される――推測されるにすぎない――経験に照らしてそれでよしとすることもまた安易で不当だろう。しかし、ここまでみてきたかぎりでは、少年デカルトが送った学校生活を想像するのに『学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』のテクストはある程度までは役に立っており、成人してなお名残をとどめているらしいかつての経験は、ふとした場面でそれとはなしに彼のテクスト中にあらわれてくる。またその経験は、たび重なることで習慣となり、デカルトの書く行為そのものを形成し、書いているあいだだけでなく、彼がいざ書こうとするさいの構えをつくる段階にまで影響をおよぼしてくる。たとえばデカルトは自分の思想をむきだしのまま人目に晒すことを好まず、なんらかのかたちで「蔽い revêtir（*integere*）」、「服を着せ habiller（*vestire*）」、「飾る parer（*ornare*）」ことを欲していた[59]。彼のそうした傾向も、イエズス会学校でのレトリック教育偏重プログラムのなかで作文練習に日々明け暮れたあの経験なしには、けっして口にされることはなかっただろう。古典古代の「良き学芸 les bonnes lettres」への回帰を謳うルネサンス人文主義の理想は、ルネサンス時代末期に『イエズス会学事規定（ラチオ・ストゥディオールム）』というテクストをつうじて教育の分野に根をおろしたわけだが、このテクストの真の効力は、こうしてある意味で、イエズス会学校のもっとも有名な卒業生のひとりであるデカルトが「書きつづけ」、彼が「書いたもの」においてつねに試されることになるのだともいえるだろう。

＊ ＊ ＊

「よくわかっていることは明晰に表現される」[60]というボワローの有名な寸言は、デカルトの合理主義をある意味で特徴づける。この“明証の哲学者”が、「文字による学問」、書物から得た知識、さらには語学学習全般に強い猜疑心を抱きつづけたことには変わりがない。じっさいデカルトは、「オネットムたるもの、スイス方言やブルターニュ方言を知る必要がないのと同様、ラテン語やギリシア語を知る必要はなく、またヨーロッパの最小の国の歴史を知る必要がないのと同様、ローマ帝国の歴史を知る必要もない」（AT, X, 503）と、その最晩年の著作とされる『自然の光による真理の探究』（1649?）のなかで断言的に述べている。デカルトにおいては、ラテン語やギリシア語といった、当時国際的威信を誇っていた古典語の学習も、結局のところ、スイス方言やブルターニュ

方言といった使用範囲の極度にせまい民衆言語を学ぶこと同様無意味であるとされ、また、語学学習はつきつめていえば膨大な知識の集積にすぎず、その意味で、それはだれも知らない小国の歴史を学んで頭のなかを記憶で満たしている状態と変わらないとみなされるのである。肝心なのはなによりもまず順序立てて自分自身で思考できるようになることであり、それさえできればどんな言語をつうじてであろうといずれその内容は明晰に表現されうる、だから言語は思考の奴隷に甘んじてしかるべきなのだ、――あまりに古典的でいかにもデカルトらしい考えが、語学学習を軽蔑的に語る上の言葉の底をつらぬいている。

しかしだからといって、デカルトは反言語主義的哲学者であると一面的に決めつけるわけにはいかないあまりに特別で複雑な事情が、彼の過去の経験を深くつらぬいていることは本稿でみてきたとおりである。10 代という、知性の面でも感受性の面でももっともデリケートな青春時代のすべてを、イエズス会学校の徹底してメトディックな言語教育を浴びてすごしたデカルトは、だからこそ、言語そのもののもつ魅力と危険をともに知りつくしていたのではないか。たとえばデカルトは理想的な古典の読書について、「最初のたった一回の読書によってではなく、少しずつそして注意深く繰り返された読書によってこそ、わたしたちはそうとは知らずに偉大な人びとの思想を自分自身に吸いこませるのであり、そうしてわたしたちは彼らの思想を消化し、またそれらをある種わたしたち自身の実質と化してしまうのです（AT, XVIII-II, 41）」と語っているが、この「読書 lecture」を「書くこと écriture」とおきかえてみてもさして事情は変わらないだろう。デカルトの思考の根底をなす部分は、おそらく、ルネサンス時代に“再発見”された古典古代の大作家と呼ばれる他人の言葉の多くによって養われたものとしてある。そこはすでに彼自身の「実質」と化してしまっているため、どの部分が彼自身でどの部分が彼ではないのか、もはや見分けがつかないものとなっている。そしてこのデカルトがみずから考えたものとしてそこに書きつける言葉は、すでにしてもうその一字一句が彼自身に対してさえ透明ではなかったはずなのである。

略号

AT : *Œuvres de Descartes*, éd. Charles ADAM et Paul TANNERY, 11 vol., Paris, Vrin-CNRS, 1963-1973 [nouvelle présentation]. 原文引用のさいは、略号（AT）、巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）の順に記す。

FA : *Œuvres philosophiques de Descartes*, éd. Ferdinand ALQUIÉ, 3 vol., Paris, Classiques Garnier, 1963-1973. 略号（AT）、巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）の順に記す。

AM : *Descartes. Correspondance*, éd. Charles ADAM et Gérard MILHAUD, 6 vol., Paris, F. Alcan-Puf, 1936-1963. 略号（AT）、巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）の順に記す。

注

(1) Geneviève RODIS-LEWIS, *Descartes. Biographie*, Paris, Calmann-Lévy, 1995, p. 25.

(2) Henri FOUQUERAY, *Histoire de la Compagnie de Jésus en France, des origines à la suppression (1528-1762)*, 5 vol., Paris, A. Picard et fils, 1910-1925, Tome Premier.

(3) ここで概略を述べたラ・フレーシュ学院の設立過程については、Camille de ROCHEMONTEIX, *Un collège de Jésuites aux XVII e & XVIII e siècles. Le Collège Henri IV de La Flèche*, Tome I, Le Mans, Leguicheux, 1889 を参照。日本語文献では、田中仁彦、『デカルトの旅／デカルトの夢――「方法序説」を読む――』、岩波書店、1989 年、12-16 頁に、より詳細な記述と考察がある。

(4) Étienne GILSON, *René Descartes, Discours de la méthode, texte et commentaire*, 1925, p. 102 ; Philippe ARIÈS, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris, Seuil, 1973, p. 152 を参照。

(5) Gabriel CODINA MIR, *Aux sources de la pédagogie des Jésuites. Le « modus parisiensis »*, Roma, Institutum Historicum Societatis Jesu, 1968.

(6) Olivier MILLET, *Calvin et la dynamique de la parole : Étude de rhétorique réformée*, Paris, Champion, 1992 ; « La Réforme protestante et la rhétorique (circa 1520-1550) », in *L'histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne (1450-1950)*, éd. Marc FUMAROLI, Paris, Puf, 1999, pp. 259-312.

(7) CODINA MIR, *op. cit*., p 151 *seq*.

(8) Louis B. PASCOE, S. J. « Response to Gabriel Codina, S. J. », in *The Jesuit Ratio Studiorum, 400th Anniversary Perspective*, ed. Vincent J. DUMINUCO, S. J., New York, Fordham University Press, 2000, pp. 50-55.

(9)『イエズス会学事規定』の詳細については、次のラテン語・フランス語対訳版に負っている。*Ratio Studiorum. Plan raisonné et institution des études dans la Compagnie de Jésus*, édition bilingue latin-français, présentée par Adrien DEMOUSTIER et Dominique JULIA, traduite par Léone ALBRIEUX et Dolorès PLARON-JULIA, annotée et commentée par Marie-Madeleine COMPÈRE, Paris, Belin, 1997.

(10) 『学事規定』の策定過程については、Dominique JULIA : « L'élaboration de la *Ratio Studiorum*, 1548-1599 », *ibid*., pp. 29-69 が詳しい。また、高祖敏明、「イエズス会学校」、上智大学中世思想研究所編〈教育思想史　六〉『ルネサンスの教育思想　下』、東洋館出版社、1986 年、299 頁も参照。

(11)『イエズス会憲・第 4 部』表題は次のとおり（仏訳）: « La formation dans les lettres et dans les autres moyens d'aider le prochain de ceux que l'on garde dans la Compagnie », in Ignace de LOYOLA, *Écrits*, éd. Maurice GIULIANI, Paris, Desclée de Brouwer, 1991.

(12) Roland BARTHES, *Sade, Fourier, Loyola*, Paris, Seuil, 1971, p. 45.

(13) ギリシア語の授業は 1 日 1 時間のみ、宿題は週に 1 度でよいとされていた。*Ratio Studiorum, op. cit.*,「レトリッククラス教師の規則・ 376〈授業時間配分〉」、p. 166 ;「同・ 385〈ギリシア語宿題の方法〉」、p. 170.

(14) Geneviève RODIS-LEWIS, *Descartes. Biographie*, Paris, Calmann-Lévy, p. 31 ; AT, V, 460.

(15) ルネサンス人文主義、レトリック、教育、それぞれのあいだにみられる特別な関連性の理解には次の文献に多くを負った。チャールズ・Ｂ・シュミット／ブライアン・Ｐ・コーペンハウアー、『ルネサ

ンス哲学』、榎本武文訳、平凡社、2003 年 ; Michel MAGNIEN, « D'une mort, l'autre (1536-1572) : la rhétorique reconsidérée », in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne, 1450-1950*, éd. Marc FUMAROLI, Paris, Puf, 1999, pp. 345-347 ; マドレーヌ・ラザール、『ラブレーとルネサンス』、篠田勝英・宮下志朗訳、白水社、文庫クセジュ、1981 年 ; *Le dictionnaire du littéraire*, éd. Paul ARON, Denis SAINT-JACQUES et Alain VIALA, Paris, Puf, « Quadrige », 2004.

(16) 西欧教育史におけるレトリックの位置づけと役割については、Henri-Irénée MARROU, *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*, Paris, 1948 ; André CHERVAL et Marie-Madelaine COMPÈRE, « Les humanités dans l'histoire de l'enseignement français », in *Histoire de l'éducation*, no. 74, mai, 1997, pp. 5-38.

(17) François de DAINVILLE, « L'évolution de l'enseignement de la rhétorique au XVIIe siècle », in *L'éducation des Jésuites (XVIe - XVIIIe siècles)*, Paris, Minuit, 1978, p. 185.

(18) Cf. François de DAINVILLE, *La Naissance de l'humanisme moderne*, Paris, Éd. Beauchesne et ses fils, 1940, Chapitre I « La Vacation lettrée » ; Pierre MESNARD, « La pédagogie des Jésuites (1548-1762) », in *Les grands pédagogues*, éd. J. CHATEAU, Paris, Puf, 1956, p 68.

(19) イグナチオ・デ・ロヨラ、『霊操』、門脇佳吉訳、岩波文庫、1995 年、「解題」、p. 35.

(20) *Ratio Studiorum, op. cit*.、「管区長の規則・ 24」、p. 78、および「校長の規則・ 86」、p. 92.

(21) CODINA MIR, *op. cit*., p. 84.

(22) *Ratio Studiorum, op. cit*., 375, p. 165.

(23) ROCHEMONTEIX, *op. cit*., Tome III, Chapitre I, p. 4.

(24) DAINVILLE, *op. cit*., 1978, p. 190.

(25) GILSON, *op. cit*., p. 101.

(26) 論理学については、『方法序説』「第 2 部」で言及される（AT, VI, 17）。

(27) ROCHEMONTEIX, *op. cit*., Tome III, Chapitre I, p. 4.「文法クラス」は生徒のレベルに応じてさらに下級 inférieure、中級 moyenne、上級 supérieure の 3 クラスに分かれており、それぞれ「第五学級 la cinquième」、「第四学級 la quatrième」、「第三学級 la troisième」とも呼ばれる。同様に「レトリック学級」は「第一学級 la première」と呼ばれた。

(28) *Ratio Studiorum, op. cit*.,「人文学教師の規則・ 395」、p. 174.

(29)「寓話」と「歴史」のちがいは、散文によるその記述が事実にもとづいたものであるかないかにあるとのこと。Cf. Anne BRUTER, « Entre rhétorique et politique : l'histoire dans les collèges jésuites au XVIIe siècle », in *Histoire de l'éducation*, no. 74, mai 1997, p. 73. また「寓話」は「神話 mythologie」の別名であるとも。Cf. CHERVAL et COMPÈRE, *art. cit*., p. 34. 「寓話」の多くは道徳的教訓をともなっている。

(30) *Ratio Studiorum, op. cit*.,「褒賞の規準・ 312」:「つねにラテン語散文が優先される」、 p. 149 ;「下級クラス教師の規則・ 344」 :「宿題の提出は、ラテン語散文は毎日、ラテン語韻文は週に 2 度、ギリシア語は週に 1 度」、p. 156.

(31) Antoine FURTIÈRE, *Dictionnaire universel*, Tome I, Genève, Slatkine Reprints, 1970 [Réimpression de l'édition de La Haye et Rotterdam, 1690], 見出し語 « curieux » を参照。

(32) Adrien BAILLET, *La vie de Monsieur Descartes, I*, 1691 [Reprint in Hildesheim / New York, Georg Olms Verlag, 1972], p. 20.

(33) RODIS-LEVIS, *op. cit*., p. 28.

(34) BAILLET, *op. cit*., p. 20.

(35) デカルトは少なくともジャンバッティスタ・デッラ・ポルタの『自然魔術』（初版 1558 年）は読んでいたという。Geneviève RODIS-LEVIS, *L'Œuvre de Descartes I*, pp. 22-23 ; *L'Œuvre de Descartes II*, pp. 432-433.

(36) GILSON, *op. cit*., p. 119.

(37) 田中仁彦、前掲書、17 頁。

(38) Marie-Madeleine de LA GARANDERIE, *Christianisme & lettres profanes. Essai sur l'Humanisme français (1515-1535) et sur la pensée de Guillaume de Budé*, Paris, Champion, 1995 [2ème éd], p. 33.

(39) GOETHE, *Faust*, Première partie de la tragédie, La Nuit : « Philosophie, hélas! jurisprudence, médecine, et toi aussi, malheureuse théologie!... je vous ai donc étudiées à fond avec ardeur et patience : et maintenant me voici là, pauvre fou, tout aussi sage que devant. », trad. Gérard NELVAL, Paris, GF-Flammarion, 1964, p. 41.

(40) Henri GOUHIER, *La pensée métaphysique chez Descartes*, Paris, Vrin, 1962, Chapitre III, pp. 63-90 ; 拙論「動物は言葉をもたない――デカルト動物機械論概説――」、『フランス文学語学研究』、第 24 号、早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会、2005 年、25-41 頁。

(41) アダン＝タンヌリ版には宛名人不明とされている（AT, II, 377）。宛名人をフロリモン・ドゥボーヌと同定しているのはアダン＝ミロー版デカルト書簡集である（AM, III, 74）。

(42)「1638 年から 1640 年まで、デカルトはサントポールトを生活拠点としていた。[…] 彼はめったに移動せず、この“北オランダの片隅”の平穏さのうちに留まっていた。ときおりハレムに行ったり、レネリの死にさいしてはユトレヒトに赴いたりしていた」（FA, II, 68）。

(43) Jean MESNARD, « Le XVII e siècle, époque de crise universitaire », in *La culture du XVII e siècle. Enquête et synthèse*, Paris, Puf, 1992, pp. 97-110.

(44) Émile DURKHEIM, *L'évolution pédagogique en France*, Paris, Puf, « Quadrige », 1990 [1ère éd. 1938], p. 293.

(45) DURKHEIM, *ibid*., p. 296. *seq*.

(46) イエズス会学校でどの程度「平等主義」が徹底されていたかは議論の分かれるところである。イエズス会学校は授業料を無償としていたため、比較的下層といわれる階級の子どもも入学できたのだが、じっさいには王族や貴族をはじめとする上流階級の子弟を優先して入学させ、手厚く面倒をみていたともいわれる。Cf. Pierre GUILLOT, *Les Jésuites et la musique : Le collège de la Trinité à Lyon*, Liège, Margada, 1991, p. 36.

(47) DURKHEIM, *op. cit*., p. 297.

(48) *Ratio Studiorum*, *op. cit*.,「レトリック教師の規則・ 375」、p. 165.

(49) *Ibid*.,「レトリック教師の規則・ 382」、p. 169.

(50)「十人組」の具体的な内容については、Michel FOUCAULT, *Surveiller et punir*, Paris, Gallimard, « Tel », 1975, p. 171.

(51) DAINVILLE, *op. cit*., 1978, p. 119.

(52) FOUCAULT, *op. cit*., p. 171.

(53) プレレクシォンについては、DAINVILLE, *op. cit*., 1940, pp. 98-118 、および *Ratio Studiorum*, *op. cit*., pp. 250-278 を参照。もっとも、このプレレクシォンで教師が生徒に提供する古典古代のテクスト――すなわち異教のテクスト――は、キリスト教道徳教育にかんがみて不当とされる箇所があらかじめ大幅に削除されているものだった。イエズス会学校における「テクスト不当箇所削除」の問題については、Pierre-Antoine FABRE, « Dépouilles d'Égypte. L'expurgation des auteurs latins dans les collèges jésuites »,

in *Les Jésuites à la Renaissance*, Paris, Puf, 1995, pp. 55-76.

(54) *Ratio Studiorum*, *op. cit*.,「レトリック教師の規則・ 379」、p. 167.

(55) バイエはここで「デカルトがうけた人文学 ses humanités」の全課程を 5 年半としているが、これは、文法三学級（デカルトは文法下級クラスの前に半年間の準備課程をうけている）、人文学級、レトリック学級での教科課程をすべて数えあわせた結果の数字である。先に、下級クラスの一学級としての「人文学級 la classe des humanités」の授業内容を確認したが、この意味でとらえられた場合、「人文学」という語はもっとも狭義にとらえられていると考えられる。バイエのように広義にとらえることも可能であり、いずれにしてもこの「人文学 les humanités」という語は、文脈によってその外延が変化する。この語の位置づけのあいまいさについては、Philippe CARON, *Des « belles lettres » à la « littérature » : une archéologie des signes du savoir profane en langue française (1680-1760)*, Louvain Paris, Peeters, 1992, p. 185 を参照。

(56) BAILLET, *op. cit*., pp. 18-19.

(57) Cf. Pierre GUENANCIA, *Descartes. Bien conduire sa raison*, Paris, Gallimard, « Découvertes », 1996, p. 41, および、ジュヌヴィエーヴ・ロディス = レヴィス、『デカルト伝』、飯塚勝久訳、未来社、1998 年、口絵写真参照。

(58) *Ratio Studiorum*, *op. cit*.,「褒賞の規準・ 320」、p. 150.

(59) この三表現はいずれも『精神指導の規則』「第 4 規則」中にみられる（AT, X, 374 ; FA, I, 94）。

(60) Nicolas BOILEAU, *Art poétique*, éd. Sylvain MENANT, Paris, GF-Flammarion, 1969, p. 91 (v. 153).